

特別発言

膀胱頸部硬化症の診断と治療について

金沢大学医学部泌尿器科学教室

黒田 恭一

膀胱頸部硬化症は、同義語が数多くあることから判るように、本態は単一でなく、定義にもあいまいな点があるが、膀胱頸部に限局した線維硬化性変化で、器質的病変の存在が不可欠の条件である。したがって手術時に示指頭が挿入不能である所見は重要で、逆行性造影、排尿時造影、内視鏡検査のいずれにおいても、狭小化や開放不全の所見がなければならない。また神

経因性膀胱や前立腺肥大症矮小型との鑑別が重要で、高年の症例では肥大症との合併が少なくない。治療に関しては、TURは術後硬化症を招来する可能性があり、根治手術としては開放手術が適当である。以上、昭和20年代から今日に至るまで本症についてとくに関心を寄せた1人としての考え方を述べた。